フェリとイタリの神隠し

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェリとイタリの神隠し

【Ｎコード】
Ｎ０７５４Ｚ

【作者名】
Ａｒｔｈｕｒ

【あらすじ】
そこにたどり着いたとき、俺は、何故ここにいるのかも、どうやってここに来たのかも、何も覚えていなかった。幾ら記憶の引き出しを開けても。普通の日常の狭間から入った別世界。そこで、俺はアイツと出会ったんだ・・！！
ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

アイツとの出会い（前書き）

この作品はｓｍ９６０３２６５（フェリとイタリの神隠し）に心打たれ「そうだ。小説書こう。」と思い書いたものです。ところどころ文法変だったり、話が掴みずらかったりしている可能性が大いに考えられますので、あ。無理。という方は読まないことをお勧めします。だいたい許せる。というアマゾン川並みの心の広さの持ち主の方は読んでみるのもよいかもしれません。やさしいアドバイス待ってます。

アイツとの出会い

――ありえない場所があった。ありえないことが起こった。そこは、ふとした日常の片隅に存在する狭間の世界。そこは、この世の者が入ってはいけない世界――

「ここは、一体どこなの・・？」

俺は、広い草原に立っていた。そこには青い空が広がり、ところどころによく分からない形をした石像が無造作に散らばっている。

（俺・・確か、日本の家に遊びに来たら日本とはぐれちゃって、日本の事探してたらトンネル見つけて、ここに・・）

記憶を辿っても、どういう道をたどってきたのか、何故あのトンネルの中に日本がいると思い入ろうと思ったのかが分からない。こんな所に日本がいるはずは無いないのに。幾ら思いだそうと思っても、トンネルに入るところからしか詳しく思い出せなかった。何をしていいか分からない俺は、とりあえず草原を見渡した。

「ん・・？遠くに街・・かな？」

行ってみようか・・。そう思いながら俺は足を進めた。

「ふー。ついたー。あれ？でも誰もいない・・。まだ昼なのに・・。」

（とりあえず、もうちょっとあっちまで行ってみよう・・・。）

しばらく歩いたが全く人の気配がしない。何やらおかしいとは思ったけれど帰る道が分からないのだから前に進むしかないだろう。俺はしばらく歩を進めた。ある程度進んだところに大きな建物があった。

（なんだ・・これ・・。）

煙突から煙が出ていることから中に人がいることは分かった。なにやら上のほうには旗があって「眉」と書かれている。しばらくその

建物を見ていたらぼーっとしてしまっていたようで。
―ガタンゴトン・・・―
俺はその音でぼーっとした世界から抜け出した。
「あ・・！電車の音？！」
そう思い建物までの道にかかっている橋の下を覗き込んだ。すると突然後ろから聞きなれた声がした。
「ここで何をしている！！」
（この声は・・・）
そう思い後ろを振り返ると少年が立っていた。何やらこわばった顔をしている。
（あれ・・？ドイツみたいだけど・・ドイツじゃないのかな・・・。前髪垂らしてるし・・。）
「帰れ！ここはお前のいるべき所じゃない！」
少年は言った。だが、いきなり言われても何が何だかさっぱりだ。
「え・・？」
そう言ったのとほぼ同時にさっきまで見ていた建物に明かりが灯された。
「っっ！！もう明かりが・・！俺が時間を稼ぐ！その間に！早く！」
その少年はそう言いながら俺の背中を強く押した。

俺は、何が何だか分からなかった。ただただ、走り続けた。俺が走るのと平行に進むように街灯や店の灯りがついてゆく。それに何だか黒くて半透明のものが街を歩いている。それもたくさん。その物体にぶつかりそうになる。しかし、そんなこと考えている暇はない。しばらく走った。そして、街を抜けた。
（トンネルまで戻らなくちゃ・・！！）
―ジャバジャバ・・！―
「？！」
トンネルまで行こうと街に来る途中に上った階段を降りた。すると体の腰辺りまでが冷たい水に触れた。

（水！？）
俺は水から抜け出そうと降りてきた階段を上り、階段の上に立った。先ほどまで目指していたトンネルには灯りがともり、昼間は草原だったはずのところには水があって川のようになっていた。遊覧船もある様で川にぷかりぷかりと浮かんでいる。
（そんな・・・！こんなの、おかしいよ・・・！！）
「嘘だ！嘘だ！！嘘だ！！これは全部夢なんだ！」
俺はその場に座り込んで頭を抱え込んだ。
―ギィィィィ、ガチャン。―
しばらくそうしていると、遊覧船が俺のいる岸に寄ってきたようで、船と陸とをつなぐ橋をかけたのが見えた。その橋を渡って中からさっき見た半透明の黒いものとは別の何かがやってくる。
「うわぁぁぁ！！！」
俺は急いで物陰に隠れた。わけのわからないことの連続でどうしたらよいのか分からなくなり、しばらくそこにうずもれていた。すると・・・
―ザッザッ・・！―
何かの足音がして、俺は化け物が来たのではないかと後ろを振り向いた。しかし、予想は外れていて、そこにはさっきの少年が立っていた。
「間に・・合わなかったか・・・。」
それが、俺と少年の出会いだった――

アイツとの出会い（後書き）

この作品が初投稿です。読みずらかったりよく分からない箇所が山ほどあったと思います。最後まで読んでくださったそこの貴方！本当にありがとうございました！次話も書くつもりです。またまたですが、本当にありがとうございました！！

アイツの名前。（前書き）

トンネルをくぐった。そこには不思議の街が広がっていた。俺はそこでアイツと出会った。昔からよく知ってる、アイツに――――。ヘタリア二次創作　フェリとイタリの神隠し（ニコニコから）を小説化してみた。

アイツの名前。

―麻屋(あさや)店主、アーサーの部屋―

「あーちゃー！！」

麻屋最上階に位置する俺の部屋。その窓から、やけにあわてている妖精さんが入ってきた。

「ん・・？どうした？街の見回りは・・」

やってきた妖精さんは担当制の街の見回り組の一員で、今日はその見回りの担当日だったからここにいるということは何か大変な事があったか、妖精さんがさぼっているかどちらかだ。後者はないと思うが。と、いうことは・・

「！！　何かあったのか！？」

俺はかなり大きな声で妖精さんに聞いた。

「しょれがね・・――――！！」

妖精さんは早口に俺に説明した。

「なんだって！？異世界人がこの世界に入って来たぁぁぁ？？ルートはどうした？！アイツだって今日は見回り番のはずだろ！！」

ルートが来てから今まで、アイツが見回り番の時は全くと言っていいほど悪いことはなかったし、あったとしてもアイツがすぐになんとかしていたようだから、妖精さんがあわてて俺のところに来るなんてことなかった。

（しかも、異世界人が来たときに限って・・！！ルートは何をしてるんだ――――？！）

―――「君はさっきの・・！！ねぇ、ここはどこ！？どうしてここに！？君は一体・・」

俺は少年にたくさん質問をしようとした。しかし、俺の言葉は少年

の言葉に遮られた。
「今話している時間はない！今頃、アーサーが手下を使ってお前を探している！！早く立つんだ！！」
少年は俺の手を掴んだ。俺は少年の手を頼りに立とうとしたが、足に力が入らない。俺が立てなさそうな事を感じ取ると少年は呪文を唱え始めた。
「Ｉｎ　ｌｈｒｅｍ　Ｔｅｓｔｍｅｎｔ　ｉｍ　ｎａｍｅｎ　ｄｅｒ　ｗｉｎｄ　ｕｎｄ　Ｗａｓｓｅｒ．よし、立て！」
少年は俺が答える前に走り出した。俺の足は意識していないのに勝手に動き、尋常ならざるスピードで街の路地裏を通り抜けていく。いつの間にやら大通りの方に出てきていて、その時にはもう歩いていた。そして最初に少年に会った建物へと向かっている。周りには遊覧船から降りてきたと思われる妖怪？たちや建物の中で働いていると思われる人たちがたくさんいた。しかし、俺のことが見えないようでみんな気にせず建物へ入っていったり、自分の仕事を続けている。橋の前に差し掛かる時、少年が息を止めるよう俺に指示をしたので俺は息を止めた。もうすぐ渡りきるというところで・・
「ルートヴィッヒさ～ん！」
前に、何やらこちらに向かってくる女の子がいる。
（かわいいんだけど！！息持たないから！！ちょっとどいてぇぇぇ！！！）
しかし、俺は我慢も限界で息をしてしまった。やばっ！俺はそう思いもう一度息を止め直したが間に合うはずもなく・・・。女の子は俺を見て一瞬時が止まったかのように言葉を失っていた。ほんの少しの間が空き、
「ルートヴィッヒさん・・それ異世界人ですか・・？今、中でえらい騒ぎになっとりましたよ・・！」
女の子は目を見開いて少年に言った。
「っち！！ばれたか！イタリア！こっちだ！！」少年は建物を囲む塀に付いている小さなドアを開け、目にもとまらぬ速さで俺を招き

入れた。
　扉をくぐると庭があってそこにある木の陰に隠れさせられた。
「ここにいれば、しばらくの間見つからない。いいか、騒ぎが収まったら後ろのくぐり戸から出て階段を下れ。しばらく行くとボイラー室がある。そこにいるヤツに働かせてもらえるよう頼むんだ断られても粘り強く頼め！帰りたいとか弱事をはくな！逃げるな！！分かったな！？」
そう言っている間に、建物の中から「ルートヴィッヒ様～」と少年を呼ぶ声が聞こえた。少年はその場を立ち去ろうと建物の方を見た。すると彼についての疑問が・・・。
「ねえ！！俺、君に教えてほしいことが・・！！君はどうして俺の名前を知ってるの！？君は俺について知ってるの！？」
少し安心したのだろうか。さっきまで気づかなかった事が次々と頭に浮かんでくる。
「・・・・・。俺はお前のことを昔から知っているのかもしれない。よく思い出せないのだが・・。あぁ。俺の名はルートヴィッヒ。ルートと呼んでくれて構わない。用はもう済んだか？なら失礼する。」
俺は小さくうなずいた。それを確認すると彼は名前を呼んでいる人たちの所へと立ち去った。
（ドイツじゃなかった・・。ルートヴィッヒ・・・。ルート・・かぁ・・・）

アイツの名前。（後書き）

前、同じ内容話（２話）を新たな作品として掲載してしまったので、２話をはじめに見てしまった方がいるかもしれません。本当に申し訳ありませんでした！！一話の方も見てやってくださいね。２話まで読んでくださり、すっごく感謝感謝の気持ちでいっぱいです！次話もよろしくお願いします！

麻屋で職探し！（前書き）

不思議の街にある麻屋。そこで俺はルートと出会った。そして、イタリア、麻屋で職探し運動開始！！！

麻屋で職探し！

俺はルートが建物に入った後しばらく木の影に隠れていた。もう建物の中は落ち着いているようで、これといって大きな声はしない。

「もう・・いいかな？」

俺は人に見つからないよう静かに、ルートが言っていたくぐり戸の方へ向かった。

―ギギギギ・・・―

くぐり戸はかなり古いようで音を立てながら開いた。出たところにはルートが言っていた通り階段があった。想像していたのとはちょっと（かなり・・かな・・？）違っていたが。

（何これ！！階段なのは分かるけど、手すりないし！！落ちたら確実に死ぬよぉぉ！ヴェ～！！だれかぁ！助けてぇぇぇぇ！！！）

しばらく階段の前で白旗を振った。まあ、誰も助けになど来てくれないのだが。俺は勇気を振り絞り、壁にべったりくっつきながら階段をかなりゆっくり下った。３段ほど進んだところで・・・

―ばきっ！―

怪しい音をたてて階段の木が折れた。その瞬間、俺は反射的に階段を悲鳴を上げて走り降りる。あんなに大きな悲鳴を出したのにばれなかったのがすごいくらいだ。

「ヴェ・・ヴェェェェ！！怖かった～」

気を取り直して前へ進・・まなかった。金属製のドアにぶつかった。

（もしかして・・）

「ここって・・さっきルートが言ってたボイラー室！？やった～着いたよ～やればできるじゃん、俺♪」

―ぎぃぃぃ・・―

扉をあけるとそこはまだ部屋ではなくて、短い通路があった。前には人間らしきシルエットが２つ、影で映っている。何やら声も聞こ

えてきた。
「あいやぁぁ！！腕の見せ所ある！！ヨンス！しっかり石炭運ぶよろし！！」
「うぃ～す！　兄貴～！石炭運びの起源は俺なんだぜ☆」
「・・・・・。そうあるか。分かったからさっさと運ぶよろし。変なポーズとっても誰も見てくれないあるよ。」
「冷たいですね～　兄貴～」
何やらすっごく馬鹿らしい？話をしている。何だか入り込む隙がなかったがここで引き下がるわけにもいかないので俺は通路を進み部屋に入り、そこにいる人に声をかけた。
「あ・・あのぉ・・　俺イタリアデス！！パスタとピッツァが大好きなお茶目さんです！ここで働かせて下さい！」
すると、二人同時に振り向いて。
「あいやぁ？何あるか？お前は？いきなり働かせてって・・・。」
「そうなんだぜ！俺たちは二人で楽しくお仕事してるんだぜ！お前の入る隙なんかねぇんだぜ！ね、あーにき！」
「そうじゃねぇある！！いきなり働かせろって言われても・・。ここで働くなら、まずはあへんの許可を取らねぇと・・・。」
しばらくの間沈黙が流れた。しかし、やけに声の大きな青年が奥のドアから入ってくるなり、二人に話しかけるものだから一瞬にしてその場の重い空気が消える。
「王躍（ワンヤオ）～　飯の時間やで～♪　あ、ヨンスもな。」
「ついでみたいに言わないでほしいんだぜ！！」
石炭運びをしていた方の少年は青年が来て楽しそうだったが、もう一人の薬らしきものを作っていた方の人はしばらく考え込むような顔をしていたがすぐに表情を変え、思いついたように言った。
「アントーニョ！コイツをあへんのとこまで連れてくよろし！！」
「「「え？？？」」」

麻屋で職探し！（後書き）

どうだったでしょうか？話をまとめる脳力がないのだと思います。全然話が進みませんね。まだ話がジブリの方と変わりません・・まあ、頑張ってニコニコ動画での感動を皆様にお届けできたらな～と思います。ぐったぐったですが次話の方もよろしくお願いします！読んでくれて本当にありがとうございました！！

麻屋最上階（前書き）

親分たちに会って、俺は、この世界にもいい人はいるのだと知った。親分に案内してもらってたどり着いた麻屋最上階。これから、何が起こるのだろう。俺には、予想すらできなかった――――。

麻屋最上階

「え・・？ちょ・・。王（ワン）、何言っとるん？てか、コイツって・・・？」

アントーニョという青年はすごく「何言ってんだ？」みたいな顔をしている。

「コイツある。」

そう言って王躍（ワンヤオ）という名の薬を作っていた人は俺のことを親指を使って指差した。

「え・・人なんておっ・・！！」

アントーニョは全く俺の存在に気づいていなかったようで、指差された方向にいる俺を見て目を見開き、口をパクパクさせている。

「ちょ・・！この人異世界人なん？！さっきまで上で大騒ぎになっとたんやで！！なんでここにおんねん！！」

驚かないはずがない。正確にいうと人じゃないけど。そんなことを思っていたら王さん、とてつもないことを言い出して。

「我（わたし）の孫ある。」

王さんは平然と言った。

（え・・！！俺いつからこの人の孫になったの！？）

ヨンスも驚いた顔をしているが、王さんに口を押さえられているようでモガムゴムガ！としか言えず、何を言っているか分からない。

（あ・・。もしかして、孫ってことにしてアントーニョさんに、あへん？って人の所まで連れて行ってもらえるようにしてくれてるのかも！！）

こういうときは空気を読んでみます。

「孫ぉぉぉぉぉぉ？？？？？？？王、そんなんいたんか？！なんで俺に教えてくれへんねん！も～、はようロヴィーノに紹介してやりたいわぁ！アイツ、子分欲しがってたんよ～！」

アントーニョさん、めっちゃ興奮してます。子分？何のことですか。

「まったく・・。ロヴィーノに紹介する前にあへんに紹介すること、忘れちゃダメあるよ！！」
王さん、話止めてくれてありがとう・・・。
「わーってるわ！アーサーんとこまで連れてけばええんやろ！！」
アントーニョは少し頬を膨らませながら言った。俺の方に顔を向けると勝手に自己紹介を始める。
「俺、アントーニョって名前なんやけど、みんなには親分って呼ばれてんで！お前も俺のことは親分って呼んでぇな！自分、名前なんていうん？」
「俺、イタリア。パスタとピッツァが大好きなお茶目さんです♪よろしくね～♪」
俺はアントーニョが悪い人ではないと分かり、元気に自己紹介した。
（最初この世界に来た時は、何が何だか分からなくて、やっていけないんじゃないかって心配してたけど、みんないい人そうだし、なんとかやっていけるかも・・！！）
俺は、少しうれしくなった。

「アントーニョ。そいつのことは任せたあるよ！！」
王さんは、グッ！と親指を立てながらウインクをして俺のことを送り出してくれた。

アーサーと言う人の部屋に行く途中、親分は俺にここの事を教えてくれた。
「ええか？ここではな、名前が変わんねん。アーサーがそれぞれに名前つけるんやけど・・何のために付けるんやろな？・・・。まあ、ええか。　でな、本当の名前を忘れると、帰り道が分からなくなるんやって。名前、大事にしいや。親分はもう忘れてしもうたけど。」
その他にも、この世界に入った瞬間、異世界人は前までいた世界の事を忘れてしまうこととか、俺みたいに名前を覚えてるヤツもあんまりいないとか・・・。いろんなことを教えてくれた。そんな事を

話しながら俺たちはアーサーの部屋へと向かっていく。しかし2回目のエレベーターの乗り換えの時、親分から異世界人の匂いがするとかなんとかで親分はバッシュと言う人に捕まってしまったが、親分はうまく俺の事をエレベーターに押し込んでくれたのでなんとかなった。親分は・・まあ、自力でなんとかするだろう・・。

エレベーターが麻屋最上階に着き、エレベーターの扉がゆっくり開く。最上階には他の階とは違う雰囲気が漂っていた。他の階よりうす暗く、静かで、何より怖い。エレベーターから少し歩いた所に大きなドアが現れた。直感で、この先にがアーサーの部屋があるのだと分かる。俺は、そのドアの取っ手に手をかけた――――。

――――「・・・。来たみたいだな。イタリア・ヴェネチアーノ・・・。」

俺の机の上にある水晶玉には、扉の取っ手に手をかけるイタリアの姿が映っている。

（また・・一人、集まったな・・・。）

俺はひとり、水晶玉を見ながら怪しい笑みを浮かべた――――。

麻屋最上階（後書き）

まだジブリとお話が変わりませんね・・・。本当にすみません。できる限り皆さんにニコニコ動画での感動を・・・！！って、前にも言った気がします・・・。もうボケが始まったのでしょうか・・・・。まあ、がんばって次話も投稿したいと思います！

アーサー・カークランド（前書き）

ついに俺は、麻屋最上階のアーサーの部屋にたどり着いた。そこにいたのは、少年でも、老人でもなかった。そこにいたのはただ一人。眉毛の太い青年だった。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

アーサー・カークランド

「ちょっ！！バッシュ！！勘弁してぇな！！あれは、王（ワン）さんの孫や！ならええやないか！！」
アントーニョは、両手を合わせてバッシュに頼み込んでいる。
「アイツに孫などおるわけなかろう！！嘘をついてはいけないのである！！」
バッシュはアントーニョの話に聞く耳持たない。本来ならば無視している所だったが、お客様の迷惑にならないか心配だったので言い争いを止めに二人の所へと歩いた。
「全く！！何をしているのですか？！このお馬鹿さんが！！こんなところで言い争っていてはお客様の迷惑になるでしょう！？そんなことも分からないのですか？！」
私は二人の事を叱りつけた。すると二人は私にまで言いかかってきた。
「なんであるか貴様は！！父役だからと言って威張らないでほしいのである！！それに、貴様の声の方が吾輩たちの声より大きいのである！！！」
「そうやで！ローデリヒ！！それに、これは俺たち二人の問題なんや！手ぇ出さんといて！！」
二人が私にまで乱暴な言葉を向けるものだからカチン！ときてしまいまして。
「なんなのですかその口のきき方は！！本当にあなたたちは！！いつになったら――――・・・！！」
その言い争いはしばらく続いたという・・・。

エレベーターを降りてから少しの所にあるドアの先にもいくつかドアがあった。が、今度のドアは今までのとは桁違いの大きさをしている。このすぐ先にアーサーが待ち構えているのだろうか。
（アーサーってどんな人なんだろう・・。やっぱり・・怖くて、つーんとしてて、人を寄せ付けない感じなのかな・・？もしかして、おじいさん？　あ～あ、親分、アーサーのことはあんまり教えてくれなかったんだもんな～）

―ドッキン・・。ドッキン・・・。
俺の心臓がとても早く動いているのが分かる。これからアーサーに会いに行くのだから無理もないが。
（ここで働かせて下さい・・ここで働かせて下さい・・・）
俺は心の中でアーサーに会った時の為の練習をしていた。俺は少しの間ドアの前で立っていたが、ついに扉を開ける決意をした。
「よし！いっくぞぉ～！！ヴェ～！！！」
俺は、ドアに掛けた手を引いた。
―ガチャン、ギィィ・・・
重々しい音を立て扉が開いた。その先には、さっきまでの様な通路がある光景はなかった。俺の目の前には、暖炉と、事務机に背を向けて座っている一人の青年がいた。青年はこちらに背を向けて座っているので顔をよく見ることができなかったが、彼から発せられている雰囲気などから、彼はまだ若く、年老いた老人ではないという事が分かった。身長はそこそこあるようなので、少年ではない。
「やっと来たみたいだな・・・。イタリア・ヴェネチアーノ。」
青年は回転式の椅子に座っているようで、くるっと回ってから俺の方を見てそう言った。彼の顔をようやく見ることができた。彼は、金色に輝く頭髪、澄んだ緑色の瞳を持っていた。緑の瞳は金色の髪によく映える。そして、青を基調とした服を身にまとい海賊帽のようなものまでかぶっている。指にはたくさんの指輪をし、耳には大

きな円形型の金色イヤリング。彼を説明する言葉は今まで言った他にもたくさんあるが、なにより目立つのは、眉毛である。ありえない太さをしていた。彼を漢字一文字で表すなら、「眉」である。

（あ！！だから建物の旗、眉って書いてあったんだ！！！）
今まで生きてきた中でこれほど納得したことはあっただろうか。しかし、そんなこと考えている場合ではない。今、するべきことは他にある。そういえば・・・

「どうして・・俺の名前知ってるの・・？君がアーサーなんだよね・・・？」
この人には初めて会ったわけだから、俺の名前を知っているはずがない。俺は疑問に思った。
（ルートといい、アーサーといい、どうしてみんな俺の事を知ってるんだ？？）
2、3秒すると、青年はフッと笑ってから俺の質問に答えた。
「俺はお前の予想している通り、麻屋(あさや)店主のアーサー・カークランドだ。なんでお前のこと知ってたかって・・そりゃあ、お前のことを待ってたからに決まってんだろ。あ、俺の為だからな！！勘違いすんなよ！！！」

アーサーさん・・。思ってたのと、なんか・・印象違います。

アーサー・カークランド（後書き）

５話まで読んでくださった方がいるなんて・・！！！感謝感謝です！皆様に楽しんでいただけるお話を目指して頑張ります！！暇な方は評価・感想の方お願いいたします！ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア（前書き）

――――俺は、俺の望む世界を作るんだ。誰にも、邪魔はさせねぇ・・・。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア

「ここは神の国。お前には国ではなく、人間として働いてもらうぜ。」
ここには神様がいるようだ。その前に、アーサーは俺のことをなんでも知っているのだろうか・・？俺が国だということまで知っているなんて。

（あれ・・てか俺、働かせて下さいって言ってないのに・・。まあ、いっか♪働かせてもらえるなら特に問題ないし！しばらくの間元の世界には帰れないのかなぁ・・。）
アーサーは机に座ったまま何かを探している。
―ガサゴソガサ・・。
「お！あったあった！」
アーサーはＡ５サイズ位の紙を持って俺の所まで歩いてきた。そして、先程まで探していた紙と、万年筆を俺に手渡した。
「これ、お前の契約書な。ここに名前書け。」
アーサーは紙の右端を指差した。
（えっと・・名前書ける所は・・・。）
俺は暖炉の前の石の床で名前を書いた。「イタリア・ヴェネチアーノ」と・・・。
アーサーは俺が名前を書き終わるのを見ると契約書を俺の手から取って、しばらく俺の名前を眺めていた。寂しそうだけど嬉しそうな目で。アーサーは俺の名前の上に手をかざした。すると、俺の書いた名前がアーサーの手へと吸い込まれていく。吸い込まれた字と入れ替わるようにして違う文字が手から出てきて紙に張り付いた。

「いいか、これからお前の名は「フェリシアーノ・ヴァルガス」だ。分かったら返事しろ！」
「は、はいぃぃ！！！」
突然言われたものだからびっくりしてしまった。

アーサーは俺を指差しながら自信満々の顔で言った。
「よぉし！！そうと決まればお前は今から俺の部下だ！！分かったな！？」
その後、天井からぶら下がっているロープを2回引いた。誰かを呼んでいるようだ。2分位すると、俺が入って来たのとは違うところから少年が現れた。

―――「お呼びですか？アーサー様。」
俺は自分の目を疑った。なぜかって、そこにルートがいたからだ。まさかここでルートが来るとは思っていなかった。俺は驚きすぎて声を出すことができなかった。アーサーは目を見開いて静止している俺（珍しいよね。開眼してる俺。なんで気づかなかったんだ・・。）を気にも止めず話し出す。
「今日から、コイツがここで働くことになった。アントーニョ達んとこまで連れてけ。あぁ、ローデリヒ達にも紹介しておけよ！」
俺はルートに連れられ部屋を出て、エレベーターに乗った。

―ガチャン。
ドアが閉まり、二人の姿が見えなくなった。
「・・・。また一人集まったな・・・。」
俺は、二人が出ていった扉を見つめていた。すると・・・
「あ～ちゃ～どうちたの？あの人、異世界人なんだよねぇ？ここで

働かせていいの？」
俺のズボンを掴み、俺を見上げながら小さなアルは言った。腕には白クマの人形を抱えている。
（いつの間に一人で歩けるようになったんだ！！？？）
「あるぅぅうう！！！いい子にねんね出来てたなぁ！歩けるようにもなって！！さすがは俺の弟だ！！」
アルに頬ずりをしたら、嫌がられた・・・。うっ・・・（泣）。
「ねぇ、いいの？」
アルはどうしても気になるようで、ズボンを引っ張って俺に聞いてくる。アルに教えるつもりはなかったのだが・・。
（仕方ないな・・・。）
「アイツは異世界人だけどいいんだ。アイツは人じゃなくて国なんだ。だから・・・いいんだ。　これで満足か？アル？」
俺はアルの目線に合わせて座って本当のことを教えた。アルは疑問が解けて嬉しそうな顔をしている。
「うん！！わかったんだぞ！教えてくれてありがとう！あ～ちゃー！！」

（この顔がかわいいんだよなぁ～この時代のアルは・・・。）

――――――絶対、俺の望む世界を作ってみせる。見てろよ、イギリス・・・。

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア（後書き）

今回の話はいつも以上にぐちゃぐちゃですね。わかりにくい所があったら教えてください！頑張って直します！６話以降もよろしくお願いします！

結成。麻屋トリオ。（前書き）

――「名前、大事にじいや。」俺は親分の言ったことを軽く流していた。自分の名前なんて、忘れるわけないから――――　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

結成。麻屋トリオ。

俺たちはエレベーターを3回乗り換え、階段を降りて広場のようなところに出た。するとそこには親分がいて、何やら心配そうな顔をしている。横にはそれをアホらしいといった感じに見ている少年がいた。頭からはくるんと一本、毛が生えている。

「あ・・！おやぶ・・」

俺は親分に近づこうとしたが、ルートに腕を引っ張られてしまった。

「こっちの方が先だ。アイツとはまた後で会えるから心配するな。」

ルートは俺の手を引いたまま、広場のような所の端の、机が置いてある所まで歩いていく。

「ん・・。ああ、ルートヴィッヒ。その方がフェリシアーノさんですね。先程アーサーから連絡が来ました。アントーニョの所で働かせろと。」

机に、父役：ローデリヒと書いてある札が置いてある。その位置に座っているのだからこの人はローデリヒという名なのだろう。その隣にはさっき親分を捕まえていた人が座っている。札には、兄役：バッシュと書かれている。

「ああ。その前に皆に紹介した方がいいだろうか？」

ルートはローデリヒという人に首をかしげて聞いている。

「いえ。別にいいでしょう。どうせアントーニョが部屋で皆さんに教えて回るでしょうし。」

ローデリヒは親分の方を見ながら言った。

「そうだな。おい、アントーニョ！！　こっち来い！！」

ルートは遠くにいる親分に聞こえるような大きな声で親分を呼んだ。すると、さっきまで心配そうな顔をしてオロオロしていた親分は、俺を見つけた瞬間パアッと明るい顔になり、こちらに走ってくる。

「いったちゃ～ん！！」

（え・・？イタちゃん・・？って誰だっけ・・。）

「アントーニョ。コイツはフェリシアーノだ。これから、お前とロヴィーノの班で働くことになる。頼んだぞ。」
ルートはそう親分に伝えた。そう、俺の名前は、「フェリシアーノ」だ・・・。

「ん・・。ああ、わかったわ。任しとき！！」
親分は親指を立ててウインク、俺を送り出してくれた時の王（ワン）さんみたいな感じ（もろかぶっている）でルートに話しかけた。
「ロヴィーノ。コイツは今からお前の子分や！しっかり仕事教えたるんやで！」
親分は隣にいるロヴィーノという少年にそう言った後、ロヴィーノが答える間もなくしゃべりだす。
「ほな！俺、他の奴らにもフェリちゃんの事紹介せんといかんから。また明日な！！」
親分は、ルートやローデリヒさん、バッシュさんに軽く挨拶をすませ俺とロヴィーノの腕を引き、そそくさと広場を立ち去った。

「ふぅ・・・。フェリシアーノ！！あかんやないか！！俺との約束やぶってしもたら！！」
灯りが付いていない月明かりのみに照らされているうす暗い部屋で、親分がいきなり俺にお説教を始めた。
「やく・・そく・・・？？？」
俺はなんの事だか分からなくて首をかしげた。すると親分は一回溜息を吐きだして。
「名前、大事にせぇって言ったやないか・・・。」
親分は目線を下に向けている。少し怒っているのだろうか。

「あ・・・。」
俺は親分に言われて思い出した。自分の名前が「フェリシアーノ・ヴァルガス」ではないことを。そこまでは思い出せたが、自分の本当の名前が思い出せない。
「自分の名前、覚えてないんか。もうみんな記憶書き換えられてしもてるで。俺も、さっきまで覚えとったんやけど・・・。」
（え・・？）
「お前がよく考えないでコイツの名前大声で言ったからだぞ！ばかやろー！！あん時お前が名前呼ばなかったら、ルートはみんなに忘却魔法かけなかった！！」
ロヴィーノはちぎーといった感じで親分の事をつついている。
「しゃぁないやないか！俺、そこまで考えられるような頭もってないわ！」
それから3分くらい親分とロヴィーノの言い争いは続いた・・・・。

「こうなったら最後の手段や・・。みんなで自分の名前を取り返しに行くで！６つ先の駅らへんに住んどる「フランシス」ってヤツがホンマの事知っとるて聞いたことあるわ！」
親分は言い争うの途中で思いついたらしく、フランシスという人の所へ行こうと言い出した。
「本当か！？このやろー！　で、電車の切符はどこにあるんだ？！」
ロヴィーノは目をキラキラ輝かせて親分に聞いている。
「あ・・。ないわ。」

「「え〝・・・。」」

しばらく、元の世界には帰れなそうです・・・。

結成。麻屋トリオ。（後書き）

なんだか最近、ただでさえボロクソな文法がボロボロクソクソになってますね。こんなになっても読んで下さる方感謝ですよ～！！頑張って完結させたいと思います！（まだ当分続くのかなぁ・・）

黒鷺（前書き）

昨日の夜、寝ないでずっといろんなことを考えた。でも俺は、本当の名前を思い出すことも、元の世界に戻る方法を見つけることもできなかった。そして、この日の朝をきっかけに、時の歯車が回り始める――――。

黒鷲

―がさがさ・・
俺は昨日からずっと起きていたが、まだ朝早いので布団の中でうずまっていた。すると部屋の入り口から誰かが歩いてくる音が聞こえた。その足音は俺の頭の所までやってきそうなもんだから、ちょっと怖くて布団を頭までガバッとかぶった。
「橋の所まで来い。あんまりメシ食ってないんだろ。たまにアーサー手作りのが出るしな・・。うまいメシ食わせてやる。・・・早く来いよ。」
その声の主は化け物でも、妖精さんでもない。ルートだった。
「ルートっ・・?!」
俺はすぐに布団から起き上がったが、そこにルートの姿はない。
（もう行っちゃたのかな・・。足早いな、ルート・・・。）

俺は、王（ワン）さんとヨンスが薬を作っている部屋（まだ寝ていたが）を抜け、階段を上がり、くぐり戸をくぐって橋の手前に出た。そこにルートの姿はない。橋の向こう側にいるのだろうか・・。
（行ってみようっと・・。）
橋を渡りきると、横にはルートがいた。
（いつの間に・・!!ルートってニンジャなのか・・!?↑冗談です。）
「こっちに来い。」
ルートはそう言って俺をトウモロコシが植えられている畑の後ろに連れていった。
「ここなら、人目には付かないだろう。トウモロコシの葉で隠れてるからな・・。」

そう言いながら辺りに人がいないのを確かめ、懐からタケノコの皮に包まれたおにぎりを取り出し、食え。といって俺に差し出した。俺は差し出されたおにぎりを手にとってすぐに食べ始める。おにぎりを食べていると抑え込んでいた感情が湧いてきて、思わず泣いてしまった。

「泣くな。きっと戻れるから。」
ルートは俺がおにぎりを食べ終えたのを見るともう一つおにぎりを差し出しながらそう言った。
「ルートも名前を、忘れてしまったの？」
俺は泣きながらルートに尋ねた。
「ああ、そうだな。だけど俺は・・・まだ帰るわけにはいかないから、いいんだ。」
ルートは、空を見上げながらそう言った。そんなルートの姿を見ていたら、いつも間にか涙も収まっていた。

「一人で戻れるな？」
ルートは俺を橋まで連れて行ってくれた。
「うん。ルート、ありがとう。俺、頑張るね・・！！」

橋を渡りきり空を見ると、黒く大きな鷲(わし)が飛んでいるのが見えた――――。

黒鷺（後書き）

読んで下さった方々、本当にありがとうございます。次話では不憫さんが出てくるようです。不憫ファンの方々は楽しみにしていてくださいね！

クニナシ（前書き）

橋の所で会った鷲、それは、ルートなのだろうか――――？　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

クニナシ

「うわぁ・・。おっきいなぁ・・・。」
俺は上空を舞う大きな黒鷲を見て、そう言いながら湯屋へと向かった。しかし俺は、とある声に呼びとめられた。
『おい。そこのヘタレっぽいヤツ。』
聞いたことがあるような・・・ないような・・・。あやふやした声だ。俺は誰だろうと思って後ろを向いた。そこには、半透明の人間がいた・・・。
「幽霊!?ぎぃぁぁぁぁ!!!!なんでもするから!なんでもするから殺さないでぇぇぇ!!!!」
俺は無我夢中で叫んだ。
（まだ元の世界に戻っていないってのに、死にたくないよぉぉぉ!!!!）

『ああ!!もう!何もしねぇよ!なんでもするんだよな?お前。』
半透明の人は俺にそう聞いてきた。
「うん!なんでもするよぉ〜!!お願いだから殺さないでぇぇぇ!!!!」
答えはもちろんイエスである。
『なら・・・。1つ頼んでもいいか?俺はもう、存在すべき国じゃなくなったから、もう、帰れないが・・・　ルートヴッヒはもう、帰らないと駄目だ。頼むから、あいつを連れて帰ってくれないか?』
半透明の人はそれだけ言い残し、ささささーと消えてしまった。
（なんだったんだろう・・。さっきの・・・。ルートを元の世界に戻してって言ってたけど・・。ルートも俺の世界から来たのかな・・?だからルート、俺の事知ってたのかも・・・。まあ、いいや。早く親分たちの所に行かなくちゃ・・!!）
俺は急いで親分たちの所へ向かった――。

「もう！どこ行ってたんや?！俺とロヴィーノ、めっちゃ心配してたんやで！」
親分はロヴィーノと一緒に説教を始めた。まあ、この一言で説教は終わったのだけれど。

その後俺はいたって普通な一日を過ごした――。

――『おい・・！！お願いだから、ルートを・・！ルートを連れて帰ってくれ・・・！！』
俺は真っ暗な場所に立っていて、声だけがその場に響いていた。
（この声・・昨日橋の所で会った・・・――。）

「――フェ・・ゃん！！フェリ・・ゃん！！フェリちゃん！」
―がばっ！
「ゆ・・夢かぁ・・。」
俺は親分の声で夢から覚めた。今のは・・夢、だったのか。
「どうしたんだ?フェリシアーノ?」
ぼーっとしている俺を見て、ロヴィーノが肩をゆすってくる。
「夢・・って、何があったんや?怖い夢でも見たんか・・?」
親分は心配そうな顔をしている。ルートを連れて帰ってくれと、橋でも言われ、夢でも言われ・・・。もしかしたら、聞き流してはいけないのかもしれない・・。かといって一人でどうにかできるわけではない。そうだ、親分たちに相談しよう。そうすれば、きっとルートも、俺も、みんなも、元の世界に戻れる・・・。
「あ、あの・・！」
俺は親分達に昨日会った橋での出来事、今朝の夢、全部を話そうと

した。でも、その言葉は言い切ることができなかった。俺たち三人がローデリヒさんに呼ばれたからだ。
「あ・・・。」
「そんな所で寝ぼけてないで、さっさと仕事に取り掛かりなさい！全く！このお馬鹿さんが！」
ローデリヒさんは頭に付いているマリアツェルをピコピコさせて怒っている。
「タイミング悪いぞ、このやろー・・。」
「しゃぁないなぁ・・。　フェリちゃん、すまんなぁ。その話、夜の自由時間に聞かせてもらえっか？」
二人はそう言って、まだ起きたばかりで用意のできていない俺を置いて仕事に向かった。
（早く準備して仕事に行かなきゃ・・！！）
俺は急いで支度を済ませた。ふすまを開けて廊下に出ようとすると、後ろの方から紙のこすれる音近づいてくる。
「なんだろ・・？」
俺は音の正体を確かめようと、ガラス張りの扉をガラッと開け、外の手すりに寄りかかって外を見た。するとそこには黒鷲と、その黒鷲を追っている紙のような鳥が飛んでいるのが見えた。黒鷲の方は何やらぐったりとしていて、フラフラしながら飛んでいた。
「橋の所で見た鷲だ――――！！」
俺はその黒鷲を見てルートだと思った。なぜそう思ったのか分からない。でも、直感的に感じたんだ。あれは、ルートだって――――。

クニナシ（後書き）

やっと不憫君が出てきましたね。動画のコメによると、カオナシは孤独の神様らしいです。ピッタリですね。今回も読んでくださってありがとうございます！次話もよろしくお願いします！

仲間。（前書き）

俺はもう、一人じゃない。それは今だけじゃなくて・・・。これから先も、一人でなんでも解決しようとしてた今までだって、「ひとりぼっち」なんかじゃなかったんだ――――。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

仲間。

「ルートっ！しっかり！こっち！！！」
俺は黒鷲に向かって叫んだ。すると黒鷲はさっきまでと同じようにフラフラしながら、こっちに向かって飛んでくる。俺はルートが部屋に逃げ込めることができるようにガラス張りの扉を思いっきり開けた。
―ガガガガガガ・・！！
俺がドアを開けたのと同時にルートが入って来た。ルートを紙のような鳥の一部はガラス張りの扉に張り付いた。
（この鳥みたいなの・・、ただの紙だ・・！！さっき飛んでたのに・・・！！！）

―クォ～・・クォ～・・
部屋の中でルートが鳴いているのが聞こえる。何やらとても弱々しい声だ。
「ルート！！」
俺は急いでルートの元へ向かい、大丈夫？と声をかけたが、ルートは外を見つめたと思うと、すぐにバサバサッと外へ飛び立ち、麻屋の上の方を目指し飛んでいってしまった。麻屋最上階にはアーサーの部屋がある。
「アーサーのとこへ行くんだ・・！！」
（どうしよう・・。あんなに弱ってるのに・・！ルートが死んじゃう！！）
俺は走って部屋を出て、アーサーの部屋へと向かった。階段を上ろうとしたところで、階段を上がって来た親分たちに呼びとめられた。俺を呼びに来たのだろう。
「フェリちゃん、どしたんや？！そんなにあわてて・・・。それに

泣いとるやないか！」
親分とロヴィーノは心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。
「ルートが死にそうなんだよ・・！！今、アーサーの部屋に向かって行っちゃって・・・！すごい弱ってたのに・・！！！」
俺は泣きながら、それだけ言ってその場に座り込んでしまった。

「そうか・・。なら、ルートを助けに行かな！こんなとこで泣いとったらあかん！」
たったあれだけの言葉ですべての事が分かるわけがない。それなのに、親分はいつもとは違うキッとした目つきで俺を見つめ、しっかりとした口調で俺の腕を掴みながらそう言った。ロヴィーノも、言葉を俺に伝える事はしていなかったけど、しっかり俺を見つめていたから親分と同じような気持ちなんだろう。

――俺は、あの時どれだけ二人に救われただろう。

「おや、ぶん・・・　ろ、う〝ぃーの・・！！」
俺はもう涙が止まらなくなって。二人の腕の中に飛び込んだ。
「わぁっとる。全部一人で解決しなくたってええんや。みんなで、元の世界に戻ろぅな・・・。」
親分はやさしい声で俺を励ましてくれた。
「う・・ん、うん・・！！」
俺は、凄く嬉しくて、また泣いてしまった。だけど、今度の涙はさっきのつらい涙とは違って、嬉しさから出た涙だった。

「ほな、フェリちゃんの涙が収まったとこで。アーサーの部屋行こか。急がなあかんのやろ？」
親分はいつもの明るい笑顔で、俺に手を差し伸べた。
「そうだぞ！このやろー！！もう結構時間たってるぞ！」

――そうだ。俺は、一人じゃないんだ。俺には一緒に元の世界に戻る仲間が、一緒に元の世界に戻る方法を探してくれる仲間がいるんだ――――。

「うん。行こう。この世界からルートを、みんなを助けだすために・・・・。」

―それからの俺の心には、「迷う」なんて言葉も、「一人で解決する」なんて言葉も存在しなかった――。

仲間。（後書き）

どうでしたか？一人じゃないのはイタリア君だけじゃありません。今この文を読んでいる貴方も、あなたの周りにいる、ひとりぼっちに見える人も、です。どんな人の周りにも、その人を良く見てくれている方がいるはずです。いないと思っている方は気づいていないだけだと私は思います。

そんな事が伝わればいいなあ、と思い書いてみました！１０話まで読んでくださって本当にありがとうございました！

子供部屋（前書き）

俺は親分とロヴィーノ、二人の仲間と共にルートを助けにアーサーの部屋へと向かった。アーサーの部屋にたどり着く前に着いたのはやけに散らかった子供部屋で――――。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

子供部屋

アーサーの部屋に行くにはエレベータを使うしかない。が、エレベータはいつもバッシュさんがエレベーターボーイをしているのだ。アーサーの部屋に行きたいですなんて言ったら、いきなり発砲されるに決まっている。

「どないしょ・・・。」
親分は頭を押さえてアーサーの部屋に行く方法を考えていた。その横には、窓の外をボケーッと見ているロマーのがいる。目の前で手を振っても全く反応がない。
「ロヴィーノ??」
俺はロヴィーノの肩をポンポン叩きながらロヴィーノに呼びかける。ロヴィーノはいきなり目を見開くと、俺たちに一つの案を提案した。
「あのよ・・・。窓から出て屋根の上渡って行けばいいんじゃないか・・?屋根の先に梯子あったから結構上まで行けると思うぞ。」
ロヴィーノは淡々と話した。

「え・・。そうなん?ロヴィーノ。」
今度はロヴィーノではなく親分がポケーッっとしてしまった。あれだけ一生懸命考えていたのにローヴィーノに案を出されてしまったのだから理解できなくもないが。

「こっちだ。」
ロヴィーノは廊下のつきあたりにある、少し小さめの窓から屋根にトンっと飛び降りた。俺と親分はロヴィーノの背中を追ってゆく。しばらく進むとロヴィーノは歩を進めるのをやめた。
「ここから先に行くには塀を歩いて行かなきゃいけないんだ。」
ロヴィーノがそう言った先には平均台くらいの幅の塀がある。落ち

たら死ぬというくらいの高さがあった。
（ヴェ・・ヴェェェェェェ！！！！！！！！！）
いつもなら白旗を振って逃げかえっているところだ。だけど、今はそんなことしない。できない。俺は先に塀を歩いているロヴィーノの背中を追いかけた。

「ハアッ・・ハアッ・・！！渡りきれたよ～！！」
俺はやっとの思いで塀を渡りきった。親分は俺とロヴィーノの後ろを歩いていた上に、塀を渡るのがすごく遅いようでまだ塀を歩いている。
「おやぶ～ん！大丈夫～？」
「ん・・・ああ！だいじょう・・うおっ！」
全然大丈夫に見えない。俺がハラハラして親分を待っていると、ロヴィーノは「先行ってんぞ～」と言ってすぐ後ろにあった梯子を上りはじめた。
「あ・・！！ロヴィーノ！親分の事置いてっちゃっていいの～？」
そう言いながら俺も梯子を登り始めていた。すると、ロヴィーノは梯子を上るのを止めて俺の方をジッと見た。
「お前・・むきむきジャガイモの事助けたいんだろうが。なら早く行かねぇと。」
ロヴィーノはそうとだけ言うと再び梯子を上り始めた。
（むきむきジャガイモって・・ルートの事なのか・・？確かに俺はルートを助けたい・・・。親分ごめん、置いていきます・・。）
俺はロヴィーノに返事をしていなかった。だけどロヴィーノの背中を見ていると言葉なんか使わなくても俺の気持ちが通じているような気がした。俺はロヴィーノと一緒にそのまま梯子を上っていく。ルートを助けたい。その気持ちだけが俺の頭の中を埋め尽くしていた。

「お～い！もうすぐ梯子無くなるぞ～！」

かなり梯子を上ったところでロヴィーノはそう告げた。俺もかなり疲れていたけど、親分の方が疲れているだろう。親分は俺たちが置いていった後、ありえない速さで俺たちを追いかけてきたのだ。今は後ろでゼェヒューゼェヒュー言っている。

「窓・・だな・・・」
梯子を上りきるとそこには大きなステンドガラスの窓があった。
「この窓・・開くんだろうな・・このやろー・・・。」
そう言ってからロヴィーノはそろそろと窓を押した。

―ぎぎぎぎ・・・
（お！！開いた！！）
そこはまだアーサーの部屋ではなかった。バスルームのようだ。俺たちは誰かに見つからないようにそろりそろりと歩を進めていく。バスルームを出て左へ曲がり、そのまま歩いて行くと、俺たちは子供部屋のような所に着いた。
「なんや。アーサーの部屋とちゃうやんけ。」
「やけにおもちゃが散らばってるぞ・・・。　あ・・これ・・・・・！！」
俺たちは机の上にスコーンを見つけてしまった。なんだか良くないことが起こる気がしてきた。
（運気下がったよね。絶対。）
部屋をうろちょろしていたその時、
「ああ？そんなの適当に処理しとけ！ばかぁ！！」
何やら電話をしているアーサーの声が聞こえる。かなり怒っているようだ。会話を終えるとチャリンという受話器を切る音が聞こえた。
「ったく・・なんでこうもうまくいかねぇんだ・・・。」
アーサーの声がだんだん近づいてくるのが分かる。

（（（（――――やっべぇ・・・・！！！！））））

子供部屋（後書き）

今回はあんまり話が進みませんでしたね。きっと次の話では話が進むんです！え、親分の扱いが酷いって？気にしちゃダメですよ！１１話まで読んでくださってありがとうございます！

メタ坊、現る。（前書き）

「アイスくれたら道案内してあげる――――。」俺は、小さな取引をした。ルートを、俺の仲間を助けだすために――――。　絶対、死んじゃ駄目だよ、ルート・・・！！！　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

メタ坊、現る。

“ちょ・・！アーサー来おったで！はよ隠れな！！”
アーサーに聞こえないような小さな声で話しながら俺たちは慌てふためいた。アーサーがこっちに来るなんて思ってもいなかったから。
“おい！このクッションの山ん中入ってればばれねぇんじゃねぇか？”
ロヴィーノが指をさした先にはクッションの山がある。俺たち三人は急いでクッションの中に入った。

「ある～？お～い、ある～？」
アーサーはやって来てすぐに人の名前を呼びだした。誰かを探しているようだ。
俺たちはクッションの山の中でアーサーがこっちに来ないことを祈った。が、その願いは神様の所まで届かなかったようで。
「ん・・。もしかしてまたクッションの山ん中で寝てんのか・・？育て方間違ったかな・・・。」
そう言いながらアーサーは俺たちがいるクッションの山の前までやって来てクッションの山を崩し始めた。
（（（うわぁぁぁぁぁあ！！！！やめてぇぇぇぇ！！！！））））
そう思ったのと同時にアーサーはクッションの山を崩すのを止めた。こっちの願いは神様に届いたのだろうか。

「あるぅ～！またこんな所でねんねしてたのかぁ～？まったくもぉ～、きちんとベッドで寝ろっていっただろ～？」
（（（（え゛・・・・・。え゛え゛～？！））））
俺たちは自分の耳を疑った。アーサーが聞いたことのないような高い声を出して話している。あのアーサーが。
（アーサーさん、最初のイメージからどんどん離れていく・・！！

！）
俺は最初のアーサー想像イメージがどんどん壊れていくのを感じた。
それは二人も同じだったようで、目を白目にして固まっていた。

「ん～じゃあ、良い子でねんねしてるんだぞ～アル♪」
少しするとアーサーは子供部屋をでた。そしてもといた部屋に戻って誰かに「そいつの事治療しとけよ。俺はホウキに乗ってちょっと見回りに行ってくるから。」と言っている声が聞こえた。

「もうええんやないか・・？」
親分の言葉で俺たち三人はクッションの山から出ようとした。が、
―がしっ・・！！
「ひょえ・・？」
三人の中で俺だけがクッションの山の中にいる誰かに腕を引っ張られた。さっきアーサーが話していた「アル」という人だろうか。

「お前、俺にアーサーのスコーン食べさせに来たんだな。あれ食うとメタボになるんだぞ。」
そう言いながら小さな男の子は右手にハンバーガー、左手にシェイクを持ち、それを交互に食べている。
「君、メタボなの？ってか、こんな所に引きこもってた方がメタボになるよ！運動不足で。」
俺はこの子の将来の健康が気になったので食のアドバイスをした。
「運動したくないからここにいるんだぞ☆」
・・・・・。この子は反抗期なのか・・？まあ、いいや。コイツがメタボになって死のうが関係ないしね。メタボになって死ぬのかどうかは分からないけど。そんなことはどうでもいい。俺は、ルートを助けに来たのだから。
「あのさ、俺の大事な仲間が大変な目にあってるの。だから、今すぐ行かなきゃいけないの！お願い、手を放して・・？」

俺は反抗期の子供にそう言った。一刻も早くルートの元へ向かわなければならないのだ。
「ええ～・・・。じゃあ、アイスおごってくれる？なら、君の仲間に会わせてあげる。ルートヴィッヒって人なんでしょ？」
反抗期少年は俺に取引を持ちかけてきた。アイスくらいなら・・・。
「うん！わかったよ～！俺特製のアイス作ってあげる！」
そう言うと反抗期の子供はいきなり目を輝かせて。素直な少年の瞳を取り戻した。
（うわあ・・。この子扱いやすいよぉ・・・。ヴェ・・・。）
「こっちなんだぞ！」
少年はクッションの山をバゴンと跳ね飛ばし、タタタタタ・・・・と走って道案内を始めた。

「あ・・。おい、フェリシアーノ！お前どこに・・」
「また後で話すよ～とにかく今は俺についてきて！なんか案内してくれるみたいだから！！」
俺は走りながらロヴィーノに返答した。

―待っててね・・ルート・・！！絶対、死んじゃ駄目だよ・・！！

俺は強くそう願いながら少年の後を追った―――。

メタ坊、現る。（後書き）

なかなか話が進みませんね・・・。本当にすみません・・・。まあ、そのうち終わりますから。読んでくださっている方は頑張って読み切ってください！感想、評価の方大歓迎です！（優しいアドバイスなども下さるとうれしいです！）今回も読んでくださってありがとうございました！！

希望のヒカリ（前書き）

ルートは闇の中を進んでいく。俺は声を出さずに、いや・・・。出せずにルートの背中に乗っていた。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

希望のヒカリ

「こっちなんだぞ！」
アルは俺が初めてここに来た時に契約書に名前を書いた場所に立ち、石の床を指差した。そこにはルートがいた。血まみれになったルートが。

「！！！！ルートっ・・！！！！」
俺は勢いよくルートの元へ駆け寄った。ルートは黒鷲の姿をしたまま倒れていた。意識はないようでぐったりしている。後ろから、あいつルートヴィッヒなんか・・？　さあな、アイツがそう言ってんだからそうなんじゃねぇの？という親分とロヴィーノの会話が聞こえてきたが、今はその会話に入るべきときじゃない。ルートの事が最優先だ。
「ルート・・！！ねぇ、ルート！目を開けて・・・！！」
俺は泣きながらルートを抱きしめ、ルートの名前を呼んだ。何度も、何度も・・・。しかしルートは目を開けてくれない。
「死んでないよねぇ・・！！るーとぉ・・！！！」

「そいつはまだ生きてる。心配しなくていいんだぞ。あぁ、今からそいつをこの穴の中に落とす。妖精さんたちがそう言ってる。」
アルはルートを指差しながら言った。俺は周囲を見回し妖精さんとやらを探した。が、そんなものはどこにも見つからない。
「お前にも見えないんだな。きっと心がフジュン？なんだよ。アーサーが、妖精さんが見えない奴はみんなそうなんだって言ってた。」
アルはそう言いながら天井の方を見上げている。
「待って！！！どうして妖精さんたちはルートを落とそうとしてるの・・！？ルートは何もわるいことしてない・・！！！」
俺はルートをギュっとさっきより力強く抱きしめた。ルートが穴の

中に落とされないように。穴の中は暗く、そこが見えない。それほど高い所から落とされたらルートは死んでしまうだろう。
（絶対ダメ・・！！！ルートはみんなと元の世界に戻るんだ・・！！）
そう思っている間に、ルートが何者かに押されているのを感じた。
妖精さんなのだろうか。
「ダメ！！放して・・！！」
俺はどこにいるか分からない妖精さんに声をかけた。その声は妖精さんには届かず、俺はルートと一緒に穴の中に落ちた――――。

「フェリちゃん――！！！」
「フェリシアーノ・・――！！！」
二人の声が俺を呼んでいる。俺は穴から見える少しの風景とともに自分の意識が遠のいていくのを感じた――――。

―ヒュ～・・・
気がつくと、俺はルートの背中に乗っていた。ルートは黒鷲の姿で暗い道を抜けていく。俺は何も言葉にせず、ただただルートにしがみついていた。ルートは凄い速さで暗闇を翼で切っていく。

――しばらくすると目の前に小さな光が見えた。それは、俺たちが元の世界に帰るための希望の光だったんだ――――。

希望のヒカリ（後書き）

今回は短いですね～・・・。切る所が見つからなかったんです。スミマセン・・・。まあ、今回も読んで下さったそこの貴方！本当にありがとうございます！次話もよろしくおねがいします！

アタタカイ涙（前書き）

涙は涙でも。泣いた理由が違うのなら。その価値も変わるものなのです。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

アタタカイ涙

ルートはものすごい速さで暗闇を切り抜け、光の元へと向かっている。

―がががが・・・！！！

俺とルートは見覚えのある部屋に落ちていた。そこは、王（ワン）さんの部屋で。

「あいやぁぁぁああ！！我（わたし）の部屋がぁぁぁああ！！！」

王さんは驚愕していた。そして、何があったんだというように辺りを見回して、俺とルートの存在に気付いた。

「あいや？フェリシアーノ？それに・・でっけぇ鷲あるな・・・・。」

王さんは床に倒れているルートと俺を見ながらそう言った。俺はとりあえず状況を説明しようとした。

「この鷲、ルートなの・・！！！アーサーの部屋の穴から落ちて、ここに・・・・！！！」

俺が話している途中で王さんは「そうあるか・・・。」と言いながら手を俺の目の前に手を出して話を止めた。

「そんな話してる暇はないあるね。とにかく、コイツの怪我を治せばいいあるな？そんなの我にしてみればお茶の子さいさいの朝飯前ある！！」

そう言って王さんは床で寝ていたヨンスを蹴り起こし、「漢方作るあるから材料持ってくるよろし！急ぐある！」といってヨンスにお使いに行くように伝えた。ヨンスは蹴られてから一秒もしないうちに起き上がり「やっぱり兄貴には俺が必要なんだぜ～☆」と上機嫌で部屋を出ていった。

俺はヨンスが戻ってくるまでのあいた時間に、さっきは話せなかった、ルートの事や元の世界の事、フランシスという人が俺たちについて何か知っているということ、その人の所まで行くには電車の切符が必要なことなど、いろんなことを話した。
「あいや・・そうあるか・・・。ん・・？電車の切符・・？どこかで見たような気がしなくもないある・・！！！」
そう言って王さんは箪笥をガサゴソしながら漁っている。

―ガラッ！！
いきなり、すごい勢いで扉が開いた。
「フェリちゃん・・！！」
「フェリシアーノ・・！！」
親分とロヴィーノが扉をあけたようだ。親分の腕には小さなアルがちょこんと抱えられていた。二人は肩を上下に大きく揺らしている。
「ルートも、フェリちゃんも！！大丈夫なんか？アルが、穴は王躍（ワンヤオ）の部屋に繋がってる言うてな。走ってここまで来たんや。あ、妖精さんたちがルートの事落とそうとしてたんは、ルートを治療させるためやって・・・！！アーサーの命令らしいわ！」
（アーサーの命令って・・？アーサーは俺たちの「敵」じゃないの・・・！？）

そんな事を考えていた最中に、
「あったある！！これあるよ！！」
頭まで箪笥に入れて何か（切符だろうか）を探していた王さんは、やっとその「何か」を見つけたようで頭を箪笥から出し、俺の元へと小走りでやって来て小さな紙をを俺に手渡した。
「うわっ！！なんや、王躍いたんか・・・。てっきりまだ寝てたんかと・・・。」
（親分って人に気づくの遅いよね。）

王さんは親分を2，3秒睨みつけてから俺に紙きれの正体を明かした。

「これは、電車の切符あるよ。これがあればある程度駅まで行くことができるある。3人分しかないあるが・・・。」
王さんは申し訳ないように言った。が、切符があるだけでも俺たちの道は開かれる。
「ううん！！ありがとう、王さん！！俺、フランシスって人の所まで会ってくるよ！！だから、そしたら、みんなで元の世界にっ・・・！！」
この世界に来てから前よりも涙もろくなっただろうか。ただでさえ泣き虫なのに。俺はまた泣いてしまった。
「分かってるある。無理して言葉にしなくてもいいあるよ。」
王さんは俺の頭を優しくポンポンとなでてくれた。その手はとても温かかった――――。

俺は少しの間泣いた後すぐにスタッと立ち上がった。そして、電車に乗るにあたり重要なことを決める。
「誰が、俺と一緒に行く・・？？」
俺はあと二人、一緒に電車に乗る人を探していた。最初に名乗り上げたのは、親分でも、ロヴィーノでも、王さんでもなくて。

アルだった――――。

「ねぇ・・。僕を、一緒に連れてって・・！」
幼いのに、力強く、まっすぐした眼で俺を見つめていた。その眼からは、みんなの事を助けたいという気持ちがしっかり伝わってきて。すると、すぐに二人目が見つかった。
「俺も、一緒に行ってやってもいいぞ・・！！このやろーがっ！！」
ロヴィーノのその言葉からは、素直ではないけれど人を思いやる優

しさがにじみ出ていた。
「うんっ・・！！うんっ！！！一緒に行こう！！三人で・・一緒に・・・！！！」

―本当に、俺は涙もろくなった。でも、この涙は、うれしさから出たものなんだよね・・？なら、この涙は弱いものじゃないよ？　宝石と同じくらい、ううん。宝石なんかより、もっともっときれいで、大切なものなんだ――――。

俺は手で涙をぬぐったときに手に付いた涙に、じんわりと「温もり」を感じた――――。

アタタカイ涙（後書き）

何だかテンポの悪い話ですね・・・。こうするとよくなる～とか、ここはいいんじゃないですか～みたいなアドバイスを待っております！ここまで読んでくださって本当にありがとうございます！次話の方もよろしくお願いします！

薔薇の園（前書き）

一やっとここまで来れた。フランシスさんの所まで・・・――。あと少し、なんだよね・・？　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

※動画ではフェリちゃんは線路を一人で歩いているのですが、この作品では3人で歩いています。イメージと違うと思われる方は見ないことをお勧めします。

薔薇の園

「我(わたし)はヨンスが使いから帰ってきたらルートの治療を始めるある。お前は3人でフランシスの所に行くよろし。みんなで待ってるあるよ。」

そう言いながら王(ワン)さんは俺の頭をポンと叩いてから、俺たちを送り出してくれた。

「行ってくるね・・！！！」

俺は、王さんの部屋の鉄の扉をガチャリと開けて外に出た。

―「お前、置いてかれてしまったあるな。」

王躍(ワンヤオ)はひとり麻屋に取り残されることになった俺を見てそう言った。

「そやなぁ。置いて・・行かれてしもたなぁ。せやけど・・。俺、親分やさかい。子分の独り立ちは嬉しいで！」

だから、きちんと答えた。本当は寂しかったけど、嬉しいって嘘ついて。

（アルが行く言うなんて思ってなかったからなぁ・・・。ホンマはフェリちゃんとロヴィーノと、一緒に行きたかったんやけど・・・。独り立ちせな開かんのはロヴィーノじゃなくて、俺かもしれへん・・。子分離れせな・・。今頃3人ら何やってるんやろ・・――――。）

「ねぇ。ロヴィーノ。駅って、こっちにあるんだよね。」

「ん・・。そうだと思うぞ、このやろーが！！」

俺たち3人は麻屋の裏口を出て駅へ向かっていた。そこはとても神秘的な場所で、海と青空が水平線を作り出していた。後ろに麻屋がある以外はなにも見えない。線路の上にも海水が少し浸っていたから俺たちは靴と靴下を脱いで線路の上を歩いていた。

「線路辿ってけば駅まで着くだろ。一応線路の上歩いてんだからこれであってんじゃねぇの？」

3分ほど歩いた所だろうか。

「あ！あれが駅なんじゃないかな？」

アルはさっきまで周りをきょろきょろ見ていたから話していなかったけど、いつの間にやら俺たちの間で歩いていて、いきなり口を開いたものだから少しびっくりしてしまった。

「うわっ！アル、いつからそこに？！」

「さっきからずっとここにいたんだぞ！」

頬をぷくーと膨らませて怒るアルは何だか少しかわいかった。

そんな風に話しているとあっという間に駅に付いた。

「電車っていつ来るんだ？」

ロヴィーノは腕を組み不満そうにそう言った。

「あ！小さいけど遠くに見えるよ！電車！」

電車はあっという間に俺たちの前へやって来た。するとプシューといった音を立てて扉が開き、そこに車掌さんが立っている。

「あの、3人分らしいんですけど・・・。」

俺は車掌さんに王さんにもらった切符を差し出した。すると車掌さんはホワイトボードに『その切符で行けるのは薔薇の園までです。』という文字を書いて俺たちに見せた。何だかエリザっ・・！おっといけない。

「じゃあ、薔薇の園までお願いします。」

そう伝えると、車掌さんが運転席まで戻って行ったということは料金支払いが終わったということなのだろう。俺たちはそう理解して電車の中に乗りこんだ。

電車の中には黒くて半透明の人が何人か乗っていた。生きている人とは思えない。

「とりあえず、席座ろうぜ。」
ロヴィーノが席に座ったので俺とアルも席に付いた。アルは椅子の上で軽くジャンプしながら外を眺めている。

周りが静かだから何だか俺たちも話をしていなかった。これから起こるであろう事への緊張っていうのもあるのかな。薔薇の園は案外遠くて、もう辺りは暗くなっている。一緒に乗っていたお客さんも途中の駅で降りてしまったので電車の中にいるのは俺たち3人だけだった。

アルは電車の中ではしゃぎすぎて疲れたようで寝息をたてて眠っていた。ロヴィーノも首を上下に揺らしながら、必死に眠気を押さえている。
―きぃぃぃ・・・
電車は音を立ててとまった。駅の名前が書いてある看板を見ると、そこには『薔薇の園』と書かれていた。
（――着いた・・・・!!!）
「ロヴィーノ!アル!起きて!!駅に着いたよ!」
俺は肩をゆすって二人を起こした。
「本当か?!」
「ホントに?!」
いきなり復活した二人は元気よく駅に降りた。まるで遠足にきた子供のようだ。
―ガシャン。
電車はドアを閉めて次の駅へと走って行ってしまった。

しばらく電車を眺めていたら、ロヴィーノは待ち切れずに俺を呼んだ。早くフランシスさんの所に行きたいのだろう。
「おら!行くぞ!フェリシアーノ!!」
「うん!!」

―フランシスさんは、何を知ってるんだろう。　どんな人なんだろう・・・――――。

俺の胸は、嬉しさと期待でいっぱいだった。　絶対、みんなで元の世界に戻るんだ――――。

薔薇の園（後書き）

読んでくださってありがとうございます。感想・アドバイス・評価もらえるとかなり嬉しいです。次話の方も読んでやってくださいね。またまたですが、ここまで読んでくださって本当にありがとうございます！！

フランシス・ボヌフォア（前書き）

――ああ。俺を呼んだのは、お前、なんだよな――――？　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

フランシス・ボヌフォア

「ねぇ・・。本当にこっちであってるのかい？家とか何にもないぞ？」

さっきまで無邪気にはしゃいでいたアルは俺の服を強く握っている。怖いのだろう。今歩いている場所は、怪しい月明かりに照らされた青薔薇が一面に咲き誇っている場所だった。怪しく輝く月の光を反射している薔薇の中を歩くのは俺だって怖いくらいだ。

俺たちは駅の前にあった薔薇のアーチをくぐって来た。その先にフランシスの家があると思ってここまで歩いてきたが、一向に家に着く気配がない。

「アーチがあると、この先に何かがあるような気がするだろ？この場合は「家」な。」

そう言っているロヴィーノも、なんだか怖そうだ。

―キュっ。キュっ。

しばらく歩き続けていると、後ろから何かがやってくる音を感じた。

「「「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」

急いで後ろを振り返ると、そこにはこちらにやってくると思われる光が見えた。ぴょんぴょんはねながらこっちにやってくる。

「人魂？！うわぉぉぉぉぉぉ！！！！こっちに来ないでぇぇぇぇぇ！！！！！」

アルフレッドは涙を滝のように流しながら叫んだ。まぁ、来ないでって言われて止まる奴なんてあんまりいないよね。人魂は、歩を止めることなくこっちへやってくる。俺たちはその場に頭を押さえてしゃがみこんだ。

―キュゥ。

人魂は俺たちの前で歩を止めた。ガタガタ震える俺たちに、話しかけてくる声がひとつ。

「なぁ、君たち、俺を訪ねに来たんだろ？ならこっちに来い。ほら、顔上げろ。」
大人っぽい優しい声に俺たちはゆっくり顔をあげた。
そこにいたのは人魂でも、他の化け物でもなくて。
「もしかして、ふら・・んしす、さん？」
「ああ。」
そこには、少し茶色がかった金髪に、月とよく合う深い紫の瞳をしたおじ・・お兄さんがいた。光の正体はランプで、フランシスさんはランプの脚の上に乗っかってここまでやってきたようだ。
「ついてきこいよ。」
フランシスさんはランプに乗ったまま来た方に跳んでいった。フランシスさんの言った通り、俺たちはフランシスさんのの後を追った――――。

――――？ルー・・っ！ルートっ！起きて、ルートっ！！？
（誰だ？俺の名前を呼ぶのは・・・？フェリ、シアーノ・・か・・・？）
俺は暗闇の中にいた。上も下も右も左も全てが闇。声のする方を見ると、そこには闇とは対照的な光が見えた。俺はその光の元へ行かなければならないと思った。光へと飛んでいけば、俺はこの暗闇から抜け出すことができるのか――――？俺は光の元へと向かった。光の中へ入ったとたん、俺は意識を失った。
「う・・。うう・・・・。」
（ここは、どこだ・・・？）
目の前の景色はピントの合わないカメラのような感じに映っていた。人が二人見える。

「お。目が覚めたみたいなんだぜ！」
「そんなの見てれば分かるあるよ！　あいやぁ・・。わたしの事が分かるあるか～？」
（ん・・。コイツらは・・・。）
だんだん意識がしっかりしてきた。
「王躍（ワンヤオ）に、えっと・・・あぁ、ヨンスか・・。」
「ふぇぬぉ！！ルート、ひでぇんだぜ・・・！！俺の事ビミョーに忘れてたんだぜ・・・。」
「うるせぇある！！コイツは怪我人あるよ！静かにするよろし！！」
（お前の声も充分うるさいと思うのだが・・・。相変わらず、騒がしい奴等だ。）
「あ、おい。フェリシアーノ達はどうした？なんだか、フェリシアーノに呼ばれたような気がして起きたのだが・・・。」
俺は、王躍に尋ねた。
「おぉ・・！！友の力ある・・！！あぁ、あいつらは・・――――。」
王躍は俺に今までのことを簡易に説明してくれた。
「そうだったのか・・・。ありがとう。王躍、俺を助けてくれて。俺はもう行かなければならない。失礼する。」
俺は自分の寝ていた布団をたたみ、礼を行ってすぐに部屋を出ようとした。
「あいや・・？お前、その体で行くあるか・・？無茶しちゃいけねぇあるよ・・！！」
「そうなんだぜ！それに、俺だってお前に貢献したんだぜ！」
二人は俺にまだ休むよう言ってきたが、そんな暇はない。
「いや。いいんだ。本当にありがとう。次に会うときは本当の世界で会えることを祈っている。」

―俺は、俺のできる事をやらなければ・・。他の奴らだって頑張っているんだ。　そうだな、最初に行くのは・・・――――。

フランシス・ボヌフォア（後書き）

今回も読んで下さった方！感謝感謝です。本当にありがとうございます。やっとフランシスさんが出てきましたね～。まだまだ続く感じがします・・・。毎度の事ですが、感想・評価・アドバイスの方よろしくお願いします！　最後に・・・いつもこの小説を読んでくださって本当にありがとうございます！！

ツメタイ涙。（前書き）

―もしも神様がいるのなら。神様はひでぇ奴なのかもしれない。幾ら頑張ったって、俺は――――――！！　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

ツメタイ涙。

「アル～？アル～？どこにいるんだ～？」
俺はアルの子供部屋にいた。アルに会うためにここに来たのだが、アルが見つからない。
「ある～！出てきてくれ～！！」
アルがいつも寝ているクッションの山も、ぬいぐるみがたくさん置いてある部屋の隅の方も、くまなく探した。大きな声を上げて走りながらアルの事を探したものだから、自然と肩が上下に動いていた。
（アル・・？俺のそばから消えないでくれよ・・・。どうして・・・。）

自分の部屋に戻ってもう一度部屋を見回した。俺は部屋の中心に立ってアルを探す。
―ザッ・・
後ろから誰かの足音がしたので振り向くと、そこには俺を馬鹿にしているような顔をして立っているルートがいた。
「アルフレッドがいないのに、今頃気づいたのか？そんなにこの世界の管理が大変でアルフレッドを構ってやれないなら、アイツを創ったって何もないだろう？お前も、もといた場所に戻れ。」
後ろを振り向くと、そこには俺を馬鹿にしている様な顔をして立っているルートがいた。
「お前が、アルを連れだしたってのか・・！！」
怪我は治ったのかという言葉を口にする前に俺の口から出たのはアルの事だった。俺はルートの所までツカツカ歩いてルートの胸ぐらをつかんだ。
「俺が連れ出したんじゃない。アルフレッドは自分の意思でここを

出たんだ。」
ルートは表情一つ変えずに口元だけを動かして俺にそう告げた。
「アルの事はもう分かっただろう。俺は他にもやらなければいけないことがあるのでな。失礼する。」
ルートはそう言うとすぐに部屋を出ていった。
―ガチャン・・・
扉が閉まる音だけが部屋中に響く。
（俺の望む世界は、幾らやっても創れないってか・・・？！）
俺は、今の世界に納得できなくて。部屋の棚を倒し、机の上の物を一気に払い落した。俺は、そのまま床にヘナヘナとしゃがみこんんで、ただただ泣いていた。
「うっ、うっ・・・。ど、してだよぉ・・！！」
いくら泣いたって、いくら叫んだって、誰も、助けてはくれないんだ・・・！！

――――あの時の俺は、知らなかったんだ。俺に優しくしてくれる奴がいることも。涙は、嬉しいときにも流せるって事も――――。

ツメタイ涙。（後書き）

今回のたまに（結構？）かなり短い話がありますよね・・・。話も読んでくださってありがとうございます！！

ルートとギルベルト（前書き）

ルート、帰ろうよ。もとの世界に。お兄さんは、それを望んでる――――。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

ルートとギルベルト

「君たちは、俺に本当の事を教えてもらいに来たんだろう？」
フランシスさんはカップに紅茶を入れながら話した。

（あ、そうそう。あの後、俺たち3人はランプを追って小さな家までやって来たの。フランシスさんは途中で止まってくれたりしたからアルも自分で歩いてついてくることができたんだ～。）

「本当は紅茶じゃなくて、ワインが飲みたいんだけどね。この世界にはないんだよ、ワイン。まあ、あいつの創った世界だから仕方ないっちゃあ仕方ないんだけどね。」
フランシスさんは俺たちの分の紅茶を入れ終わり席に着いた。

「で？君は最初に何を聞きたいの？」
フランシスさんは目を細めながら俺を見てそう言った。
（俺の聞きたいこと・・・・。そんなの、たくさんある。だけど、一番聞きたいのは・・・）
俺は一度、唾を飲み込んだ。
「ルートは・・・どうして怪我をしてまでアーサーに従ってたの・・？！」
するとフランシスさんは手を口元にあてて驚いた。
「うわっ。いきなりそれ聞いちゃう？まあ、いいけどさ。」

俺はジッとフランシスさんを見つめた。
「・・・ルートはね。実のお兄さんを助けようとしてるの。どうやったって助けられない、お兄さんを、ね。」
（？？？）
俺は首をかしげた。もちろんアルとロヴィーノも。いきなりルート

のお兄さんがどうのこうの言われても何が何だかさっぱりだ。そんな俺たちを見て、フランシスさんは俺たちをみて子供を見ているかのようにフッと鼻で笑った。
「いきなり言われても分かんないよねぇ。最初から説明すると・・・。この世界は、もとから存在したものじゃない。この世界は、アーサーの意思によって創られたの。実はこの世界にはアーサーの手によって創られた人もいるんだけど・・・。」
フランシスさんは途中で話を止めてアルの方を見た。ロヴィーノはそこから何を悟ったのか俺には分からなかったが、ロヴィーノはハッとしてアルを抱っこして家の外へと連れていった。

フランシスさんはロヴィーノ達が家から出たのを確認すると、再び俺に話を始めた。
「この世界にいるアーサーによって作られた人は二人。アルフレッドとギルベルトだ。」
フランシスさんは人差し指と中指を立てながらそう言った。
「アルフレッド・・?!え、あ。アルの事?!あ、でも・・ギルベルトって・・・?」
俺が質問してすぐにフランシスは指をしまって俺に頬笑みながら答えた。
「ルートのお兄さんだよ。」
(ルートって、お兄ちゃんいたんだ・・・。ん?お兄ちゃん?何か忘れてるような気がする・・・。)
「アルフレッドとギルベルトはアーサーの創った幻だ。アーサーは、もともと俺たちのいる世界の人達からデータを取ってこの世界でもう一人同じ人を創ってる。だから二人は、アーサーの創ったこの世界から出られない。もとの世界に本物がいるからね。まあ、データをもとの人間に戻すことはできるけど・・・こっちの世界での記憶は失われてしまう。」
フランシスは厳しい顔をしながら話を進める。

「あぁ、そういえば。どうしてルートは怪我してまでアーサーに従ってたの？って質問だったよね。」
俺は口をかたく結びながら首を縦に振った。
「ルートはね。洞窟に行ってたの。」
フランシスはにこやかに答えたが、俺はいきなり洞窟という単語が出てきたので驚いた。
「どう・・くつ・・・？」
「うん。その洞窟は、この世界ともとの世界をつなぐ役割をしているようなものなんだ。その洞窟をふさげば、俺たちはもとの世界に戻れなくなる。それが、アーサーの狙いなの。だから、ギルベルトをこの世界に創った。」
「そんな！！！」
俺は思わず席を立ってしまった。するとフランシスさんも席を離れ、家の中をのんびりと歩き始めた。
「それでもあの子は、兄を連れて帰ろうとしてる。だから、アーサーの言いなりになってる。」
フランシスは歩を止め、俺の瞳をしっかり見つめてそう言った。
「けれど、大切な人のためにすることが、その人を悲しませることになるなんて嫌だよ・・・！」
（ギルベルトって橋の所であった人だよね・・？！とても、悲しそうな顔をしてた・・・・！！）

――――だから、みんなの名前を取り戻したい。ルートはこれ以上この世界にいちゃいけないんだ・・・！！みんなで、帰らなきゃ・・・！！！――――

ルートとギルベルト（後書き）

会話が多くて読みづらいですね～。スミマセン。前の話と間が空いてしまいましたし。年賀状制作に時間がかかってしまって・・。本当にいつもありがとうございます！

イギリス（前書き）

暖炉の中から現れたのは異世界人のイギリスさん！どこのハリー・ポ〇ター―ですか・・・。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

イギリス

―ガチャン
フランシスさんは家のドアを開け、もう入っていいよと言ってロヴィーノとアルを家に入れた。アルはロヴィーノの背中ですやすやと眠っている。疲れたのだろう。
「外に出させちゃってごめんね。アルフレッドの事外に連れてってくれてありがとう。助かったよ。」

「じゃあ、席についてさっきの話の続きでもしようか。ロヴィーノ、アルの事ソファで寝かしておいで。」
アルをソファに寝かし終わるとロヴィーノは机にやって来た。ロヴィーノはドアを挟んで二人の話を聞いていたらしく、俺たちがもう一度説明しなおさなくても大丈夫なようだ。アルは薔薇園で遊んだあとすぐ寝てしまったので話は聞いていないとのこと。

「おい、フランシス。どうしてアーサーはもう一つの世界をここに創ったんだ？それに、アーサーは何者なんだ・・？？」
ロヴィーノは眉をひそめながらフランシスさんに尋ねた。
「そうだねぇ・・。こっから先の事は、俺じゃなくてイギリスに直接聞いた方が早いかも。」
「「いぎ・・りす・・・？」」
何やら聞いたことあるような、でも何かは分からない不思議な感じのする名前だった。
「うん。ちょっと待ってて。」
そう言ってフランシスさんは席を立ち、電話の置いてあるところに歩いて行った。
―ジーッ、ジーッ
黒電話のダイヤルを回す音だけが静かな部屋に響く。

―トゥルルル・・トゥルルル・・・
相手を呼び出している音がかすかに聞こえた。
―ガチャリ。
たった二回しかコールしていないのに受話器を取る音がした。もう電話がイギリスという人に通じたのだろうか。その瞬間、耳を劈(つんざ)くような声が聞こえた。
『こんの髭ぇぇえ!!電話すんのおせぇんだよ!!別にお前の事心配してたわけじゃねぇからな!!俺はただ、そっちの世界にいる奴らが心配なだけで・・・!!』
電話がある所からそこそこ離れているというのに、俺たちの所まで届くような大きな声だ。だんだん声が小さくなっていったようで最後の方はよく聞き取れなかった。
「ごめん。ごめん。ん、ああ。分かった。じゃあな。」
―ガチャン。
フランシスさんは受話器を元の場所に置き、席に腰をかけると「もうすぐこっちに来るってさ。」と言いながら、俺たちが暖炉の方を向くようにフランシスさんの後ろにある暖炉を親指で指差した。

―ぶぉん!!
フランシスさんが指を指したのと同時に暖炉に煙があがった。暖炉に火は入っていなかったのにいきなり煙が出てきたものだからびっくりして、俺とロヴィーノは目を皿のようにして暖炉を見つめた。だんだんと煙が消えていく。そこには・・・。
「「アーサーだぁ!!!うわぁぁああ!!たすけてぇぇぇぇ!!!!」」
そう、アーサーがいたんだ。
「うるせぇ!ばかぁ!!俺は「イ・ギ・リ・ス」だ!!」

イギリス（後書き）

なんだかごちゃごちゃしてますね。（いつもだろ？）すいません。
今回も読んでくださってありがとうございます！

フタツノ涙（前書き）

俺は嫌なヤツだ。全部俺と一緒だと思ってた。みんな、人それぞれに一緒に悲しんでくれる人がいて当たり前だと、思っていた――――。

俺は、気づいてなかっただけで。俺のそばにも、俺と一緒に悲しんでくれるヤツがいたんだ――――。

ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

フタツノ涙

「じゃあイギリス、説明しておいてね。俺はちょっと薔薇園まで行ってくる。」
そう言って、フランシスさんは部屋を出ていってしまった。

「よし、邪魔者が消えた所でお前たちにアーサーの事を教えてやろう。」
イギリスはやけに威張りながら俺たちに説明を始めた。席に着いた途端さっきまで威張り散らしていた態度とは対照的な、何だか申し訳なさそうな態度になった。
「・・・あいつは、アーサーは、もう一人の俺なんだ。正確に言うと俺の中の感情のひとつ、だな。」
イギリスは両肘を机の上に置いて顔の前で手を組み、そこに顔をうずめながら、少し震えた声でそう告げた。
「だからアーサーはお前にそっくりなのか・・・。でも、なんでアイツはお前の中から出ていって別の世界を創ったんだ?別に、ずっとお前の中にいても・・・」
「ずっと俺の中にはいられなかった・・・!!アイツは、感情って言っても、負の感情なんだ。寂しいとか、苦しいとか、嫌だ、みたいなヤツだ。その感情が俺の中に入りきらなくなって俺の中から出ていくしかなくなったんだ。」
アーサーはロヴィーノの言葉を途中で遮り、自分の言葉を重ねた。
(どうして人に相談しなかったんだよ・・・!そのせいで・・・みんな・・!!)
―バンッ!!
俺はテーブルを叩いて席を立った。
「どうして・・・。君はどうしてそんなに感情を溜めこんだんだよ・・・!?感情が遺志を持ってしまうまで、どうして放っておいたん

だよ・・・！！」
俺は思わずイギリスの胸ぐらを掴んでしまった。その時のイギリスの顔は涙で濡れていて。俺にはすぐ分かった。この涙は「アタタカイ涙」じゃないって。「ツメタイ涙」なんだって。
「おい・・！！フェリシアーノ！！」
ロヴィーノも席を立って俺の事を止めようとした。だけど俺は、この手を離すわけにはいかない。
「・・・っ――。」
イギリスはその場にヘナヘナと座り込んだ。俺はイギリスの胸ぐらを掴んでいたての力を弱め、イギリスの動きに合わせて俺もしゃがみこんだ。するとイギリスは、今まで溜めこんでいたものを涙と一緒に流し出した。
「うっ、うっ・・。だっ、て・・！！俺にはっ、悩みを打ち明けられる奴も、一緒に悲しんでくれる奴もっ、いないんだっ・・！！お前みたいに、いっつも人に囲まれてる奴とは違うんだよぉっ！！」
――俺は、返す言葉を失った。思えば、俺の周りにはいつも人がいたような気がする。元の世界の時の記憶はよく思い出せなかったが、それでも一人ではなかったきがする。ひとりぼっちで寂しいなんて感情を、俺の心は感じとったことなかった。だから、そういう感情を持っている奴のことを、考えてなかった――――。
―ガチャン！！
紡ぐ言葉が見つからず、イギリスの苦しみを吐きだしている音のみが聞こえる部屋の沈黙を壊したのは、勢いよく開けられたドアの音だった――――。

――薔薇園で青薔薇を積み終わり家の中に入ろうとすると、どなり声が聞こえたからドアの前で家の中に入るのをためらっていた。家の中に入るタイミングを見つけるために耳をドアに近付けて中の音を聞いていたら、イギリスの泣き声が聞こえたんだ。

「――俺にはっ、悩みを打ち明けられる奴も、一緒に悲しんでくれる奴もっ、いないんだっ・・！！お前みたいに、いっつも人に囲まれてる奴とは違うんだよぉっ！！」

久しぶりに聞いたアイツの本気の泣き声を聞いて、胸が痛くなった。知らなかったんだ。アイツがそんな事思ってるなんて。いつも泣いていたから、それが普通なんだと思ってた。こんなに苦しんでるなんて、知らなかった。

――なんで気づいてあげられなかったんだろう。どうして、悩みを聞いてあげられなかったんだろう。アーサーがこの世界を創ったのは、イギリスのせいじゃない。アイツの悩みに気づいてあげられなかった、俺のせいだ――――。

―ガチャン！！

「イギリスっ・・・！！！」

俺は自分でも意識していないのに勝手にドアを開けてイギリスのもとへと駆け寄っていた。

「ごめんな・・・？」

俺は、イギリスのそばに寄るなりイギリスを強く抱きしめ、自分の気持ちを伝えた。コイツにもう、辛い思いをさせたくなかった。今辛い思いをしているコイツの心を全て包みこんであげたかった。そんな思いがつまった「ごめん」の一言。

「ふら、んす・・・」

「辛い思いさせちゃってごめんな・・・？」

俺がイギリスを抱きしめた瞬間イギリスの涙は止まっていたのだけれど、俺がそう言うと、また泣きだしてしまった。

――でも、よかった。コイツの涙が「ツメタイ涙」じゃなくなって。「アタタカイ涙」になることができたから。もう、大丈夫。本当にごめんな、イギリス――――。

フタツノ涙（後書き）

ここでずっと気にかかっていたことを言います。この作品は友情設定です！もう一度言います。友情設定です！！　・・・ハイ。そこんとこよろしくお願いします。今回の話も読んでくださってありがとうございます！感想下さるととってもうれしいです。できるだけ早くお返しします！

真実、心の靄。（前書き）

何故だろう。その名前が、俺の心に靄をかけた――――。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

真実、心の霧。

――「・・俺、・・アーサーと話してくる・・・・・。」
俺は、俺と話さなくちゃならない。大切なことを。だから、早く行かなければならない。
「・・イギリス。大丈夫なの・・？」
フランスは心配そうに俺の顔を覗き込んできた。まあ、止められても俺の考えは変わらないのだけれど。俺は口を固く結び、大きく、そしてゆっくりと、首を縦に動かした。
「うん。もう心は決まってるみたいだね。・・・行っておいで。イギリス。　でも、どうやってアーサーの所まで行くの？まだ、移動魔法使えるまで魔力回復してないんでしょ？」
（・・あ、そうだ。すっかり忘れていた。電車に乗るには切符が必要だし、歩いていくのは時間がかかりすぎる・・・・。）
「そう・・だな・・・・・。」

―ガタガタ・・・
俺がアーサーの所に行く方法を探していると、家の窓が音を立てた。
「ん？なんだ、こんな時間に・・・・。フランス！　ドア、開けていいか？」
「ああ、いいよ～」
俺は、フランスの返事を確認して家のドアを開けた。

―ぎぃぃぃ・・
ドアを開ける音とともに、家の中に外の空気が心地よく流れ込んでくる音が聞こえた。そして、そこにいたのは、

「・・・でっけえ、黒鷲・・・？」
俺の目の前に、背中に人が乗れるのではないかという位大きな黒鷲が立っていたのだ。俺は、どうしてこんなに大きな鷲が俺の目の前にいるのか理解できずにドアを開けた格好のまま突っ立っていた。
「ルート！！」
（・・・ルートって、ドイツの事、だよな・・？）
家の中にいたイタリアが後ろから黒鷲のものだと思われる名前を呼びながら、ドアの前で立ち尽くす俺をどかしてイタリアが黒鷲の元へと駆け寄っていった。
「ルート！！もう大丈夫なの？」
黒鷲は静かに頷き、視線をイタリアから俺へと向ける。
そして俺の元へゆっくりと歩み寄ってくると、俺に背を向けて、まるでここに乗れとでも言うかのように背中を押し出してきた。
「もしかして・・・、俺を連れてってくれんのか・・・？」
俺は黒鷲に尋ねたが、黒鷲は黙ったまま、さらに背中を近ずけてくる。
（乗っていいんだよな・・・？）
「うっ・・・。よっ・・と・・・。」
位置が高くて乗るのが大変だったけど頑張って黒鷲の背中にまたがった。
（あ、そういえば、俺コイツに言っておかなきゃならねぇ事が・・・。）
「あ・・。ちょっと待ってくれ。」
俺は今にも飛び立ちそうな黒鷲に声をかけ少しの間待ってもらうことにした。
「フェリシアーノ！ちょっとこっち向け――！！」

（――――イギリスに誤った方がいいよね・・・。さっき酷いこと言っちゃったし・・・。）
そう思って、俺がイギリスの名前を呼んで謝ろうとした時、丁度イギリスが俺の事を呼んだんだ。俺は地面に向かっている顔を、イギリスへと向けた。
「今、お前に渡さなきゃいけないものがある。」
イギリスは巻物のように巻かれた紙を俺の手の平に押しつけた。俺に紙を渡してすぐ、ルートに「もう行っていいぞ。」と言ってアーサーの元へ行こうとした。ルートはすぐに地面から足を離し、星の舞う空に向かって飛んでいく。
（今、言わなくちゃ・・・！！）

――「ごめんね・・！！」　――「ありがとよ！！」
俺とイギリスの言葉は同時に口から紡ぎ出され、それぞれの心へと届いた。さっきまで心の中でもやもやしてたものは俺の発した謝罪の言葉とともに消えてしまったのだろうか。空に舞う星がやけにきれいに見えた――――。

俺たちは空に向かうルートたちに手を振って二人の事を見送った。二人の姿が見えなくなったので俺たちは一度家に戻ろうと家へ足先を向ける。家へ歩を進めながら、さっきイギリスに手渡された巻物を開いた。そこには、真実が綴られていた。たくさんの真実が。

？イタリア、ヴェネチアーノ・・・？？
何故だろう。紙に記されたたくさんの名前の中で、その名前だけがひと際目立って見えた。そしてその名前は、一度清々しくなった俺の心に、再び靄（もや）をかけたんだ――――――。

真実、心の霧。（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。感想・評価の方よろしくお願いします！小説の進歩の為に良い所、悪い所を教えてもらえると半端なく喜びます！感想などの返事はできるだけ早くしますね！よろしくお願いします！

そして、いつもありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0754z/

フェリとイタリの神隠し

2011年12月24日23時51分発行